

学 習 561

ひらがな文字の形と音韻の混同

松倉信濃

(お茶の水女子大学)

就学前に文字を教えるべきか否かという議論が近年盛んに行なわれるようになった。それは、小学校に入学した児童のほとんどが文字を読んだり書いたりできるという現実をどうとらえるべきかということからきているのであろう。

昭和42年に行なわれた国立国語研究所の調査では5才児クラスの80%程度がひらがな文字中の文字を読み、4才児クラスでも50%程度が文字を読んでいる。しかし、逆に読めない幼児もいて、読める幼児との差が大きい。

現在、幼稚園、保育園では様々な形の文字教育が行なわれている。どのような形にした就学前の文字教育を考えると大切なのは、小学校の文字教育の内容や方法をそのままおろしてきたのではなく、幼児期の学習の特徴をよく知り、それをもとにして教授方法を考えることである。

本実験では、ひらがな文字の読みの学習の発達をみていくために、現実に用いられているひらがな文字を材料に選んだ。

ひらがな文字が読めるということは、視覚的記号であるひらがなの文字と、聴覚的記号である音韻という質的に異なる2つのものを結びつけることである。この2つを結びつけるためには、視覚的記号である文字を個々に弁別できることと、聴覚的記号である音韻を個々に弁別できることが前提条件である。

「文字のパターンに定住し、そのパターンに基づいて文字の異同を弁別する基本的な機能は形成されているが、字形の微細な相違を弁別することができない。」「音節分解、抽出の行為は、文字を覚える以前に、幼児に形成されるか、もしくは、最初のわずかな数の文字を覚える中で形成され、その行為の形成が、究極的に、かな文字の習得の道を切り開くことになる。」と国立国語研究所の研究(54年)にも述べられているが、就学前期は文字の弁別能力、音韻の弁別能力、その2つを結びつける能力を形成しながら文字を学習していく時期だといえる。本研究では、文字習得を形の弁別能力、音の弁別能力の発達を通してみていくことにする。

GIBSON, E. J (1963年)は類似した文字間では形の混同が起こりやすいことをいっている。

<目的>

以下のことを明らかにする。

(1)類似したひらがな文字間では形の混同が起こりやすい。

(2)類似した音韻間では混同が起こりやすい。

(3)形も音韻も類似したひらがな文字は、形だけ又は音韻だけ類似した文字よりも混同しやすい。

(4)形の弁別能力、音韻の弁別能力はひらがな文字の習得に従って獲得されていく。

<方法>

被験者 東京都の3つの保育園、幼稚園児

4才5ヶ月～6才5ヶ月まで 90名

期間 昭和42年9月～11月

手続き ひらがな文字を次の4群に分ける。

1.形も音韻も類似 あいねほ 例「は」「か」に対し

2.形が類似 けしせさ 「い」「いたにほり」

3.音韻が類似 かふふよ 「か」「アケコタ」

4.形も音韻も類似していない うえおれ

時間の都合から4文字全てではなく、代表的と思われる16文字について実験を行なった。

①ひらがな音韻の文字の読みのテスト

どの程度読めるか知るためのもの。

4cm×4cmの文字を黒く書き、B5版大のカードに横に3つ並べたものを本のようにとじ、2ページを1段に開いて順に字を読ませる。

「くみほしえりにむけむめさついのてるれとくさげこぬめかそよせふりなたあゆわすへはあなるおをまん」国立国語研究所の調査(542年)の順序

②ひらがな文字の形の混同テスト

どの文字間で形の混同が起こるか。

形の類似については「幼児のかな文字の読み振り」国立国語研究所(547年)を参考にして決めた。

例えば「し」に似ている文字は「くつへも」である。「し」を書いたカードを提示し、次に6文字書いたカードを提示して、今見た文字と同じ形をしたものを選ばせる。「し」の場合のように4文字しかない場合は、形の類似していない文字をいれて数をそろえる。

③ いろいろな文字の音韻の混同テスト

どの音韻間で混同が起こるか。音韻の類似の基準は構音方法が近いものを類似しているとした。

例えばウの場合、形も音韻も類似していなければいいのであるから「カリナデメ」の音韻である。「ネウ」と2つの音韻を発音し、同じに聞こえたかたが、と聞こえたか被験者に答えるさせる。

〈結果と考察〉

① 形の混同テスト 90人中混同した人数

I群	あ	27	い	165	ね	28.5	ほ	18.5
II群	け	20	し	ク	や	14	さ	23
III群	う	5	え	ク	お	5.7	れ	9
IV群	か	6	ふ	5	ひ	4	よ	4

選択しの中に選ぶべき文字の無い場合

I群	あ	37	い	28.5	ね	48	ほ	30.5
II群	け	49	し	30	や	25	さ	33

I群, II群の類似した文字群に比べ、III群, IV群の形の類似しない文字群は混同した人数が少ない。選択しの中に選ぶべき文字の無い場合は特に混同した人数が多い。

形が類似している場合は混同するといえる。

② 音韻の混同テスト 混同した人数の平均

I群 66 II群 47 III群 24 IV群 44
音韻の類似した群の方が、音韻の類似しない群よりも混同されることが多い傾向がみられるが個々の音韻をみていくと、それぞれに差がある。特に混同した人数が多い2つの音は「フウ」「ホオ」「ヒイ」のようにある音と、その母音である。

③ 形も音韻も類似している文字の方が、形だけ、又は音韻だけ類似している文字よりも混同されやすいか。

表1. 形と音韻を混同した人数の比較

形	形	音韻	(2つ目の形は選択しの中に選ぶべき文字が無い場合)
あ	3	23	3
あま	0	/	7
あら	0	3	3
あわ	0	2	10
いき	/	12	8
いに	/	/	3
いり	/	/	6
ねな	/	2	7
ねめ	2	7	2
ねれ	4	19	12
ほほ	23	31	5

ないかと考えられる。

形だけ類似している文字や、音韻だけ類似している文字よりも、形も音韻も類似している文字は際立って混同されやすいとはいえない。

④ 読字数の段階別、ひとりあたりの形と音の平均混同数

読字数がふえるにつれて、混同すること

読字数	46~40	39~16	15~0
形	3.64	2.85	11.2
音	5.71	2.07	2.65

がへっていく傾向がみられる。即ち、文字を学習していくことは、文字の弁別を学習していくということになる。

⑤ 形の類似していない文字を混同した被験者

読字数39~0の被験者のほとんどは

表3.

読字数	46~40	39~16	15~0
人数	12	7	20
混同数	16	11	34
全体人数	34	21	35
全体の混同数	24	18	39

混同した文字の2つ又は1つが読め

ない。形の弁別をまだ獲得していないことから、全く形の類似していない文字を混同したと考えられる。中程度以上読め、混同した2つの文字が読める被験者の中に、形も音韻を結びつける時に起こる混同をしたと考えられる被験者がいる。

提示された文字を声を出して読み、その音声をたよりに形を探するという方法をとる被験者は、音韻の類似した文字を選んでしまうのではないだろうか。34文字~46文字読める被験者の中に、音韻が類似していることが原因で形の類似していない文字を選んだと考えられる被験者が4人いる。

⑥ 音韻の類似していない文字を混同した被験者

読字数の多い被験者の方に多い。

表4

読字数	46~40	39~16	15~0
人数	12	6	2
混同数	37	23	2
全体人数	34	21	35
全体の混同数	201	147	38

読字数が多くなれば音韻の弁別は獲得されていくという結果は、この表をみると、類似しない音韻についてはいえないことになる。

音韻の場合、類似していないと仮定した音韻の方が、類似していると仮定した音韻よりも混同されることもあったので、音韻の類似についてはもう一度検討することが必要である。

- ① 形の類似を決めるよりよい基準
- ② 音の類似を決めるよりよい基準
- ③ context の違いで、類似の程度の違いをある程度一定にする方法